

## 制約と制御

「心」の領域と「意味」の生成について

水島久光

### Constraint and Control

The domain of "mind" and the generation of "meaning"

MIZUSHIMA Hisamitsu

#### Abstract

This paper is an attempt to give due historical evaluation to the work of Mark Johnson, who, together with George Lakoff, pioneered the field of "cognitive linguistics," especially his submission of the concept of "image schema".

Johnson has been treated as a mere follower of Lakoff, but this is a mistake. The method of finding the edge of prelinguistic meaning generation in the "image schema" proposed by Johnson not only offers a new paradigm for transcending the mind-body dualism held by Western philosophy until then had lost its way out of. It was a different approach to the question of "what is the mind?" which suddenly became a thematic issue at the end of the 20th century with the development of computer science and brain science, from those of John Searle, Paul Churchland, and Daniel Dennett.

In its originality, this paper sees in it the possibility of a new philosophy to break through the deadlock of scientism challenged by the evolution of AI technology and the post-coronavirus period. Taking as its cue the composition of "mind" and "body" that Johnson inherited from Hilary Putnam, and adding the hypotheses of Wataru Hiromatsu and Andy Clark as auxiliary lines, this paper presents a new foundation for the humanities that questions what "meaning" is.

#### 0. 導入：ウイルスと AI の問い

空前の AI ブームである。それは決して突然ではなく、振り返ればアラン・チューリングの思考実験以降、伏流・浮上を繰り返していたわけだが、今回はいよいよ一定の閾値を越えた様相を呈している。もちろんきっかけは ChatGPT などの生成 (generative) AI が、実用に供するようになったインパクトだ。プログラムの出力が「人間の自然な受け答え」といよいよ区別

できなくなった状況は、まだまだ SF の世界の出来事に思われていた「機械が人間の生存権を奪う事態」が間近に迫っていることを広く印象づけている。

一方「人間の生存権」という点では、全くそれとは別レベルの危機に、ここ数年の我々は悩まされ続けてきた。Covid-19 の脅威に対して、政治判断は終息を諦め、不可視化を容認するという節目の刻み方を選択した。そもそもウイルスという半生命体の振舞いの予測不能性は、わかりやすさを求める我々の思考ルーチンを阻み、社会の分断を加速させた。ともあれ一見、別々の次元の問題のように思われるこれらの現代史的事象が、ともに「コミュニケーション」「言語使用」に関わることがらとして捉えられうる点は重要である。

ダニエル・C・デネットはウイルスの「自己を生産する行為」の特性についてこのように言う——「非人格的で、反省することがなく、ロボットのような、心のないこの小さな機械こそが、この世界におけるあらゆる主体性の究極の基礎であり、したがって意味の基礎であり、さらに、意識の基礎なのだ」(『心はどこにあるのか』p.48)。ロボットと人間とウイルスの間の存在論的連続性を基礎づけるファクターとして、ここで「意味」「意識」という言葉が用いられていることに注目したい。

ウイルスと名づけられた巨大な分子の「ロボット性」は、「適切な条件が整った媒質のなかに置いておくと、自分自身の完全に正確な複製を無意識に構成し、外に送り出すという驚くべき能力」(p.44) に表れる。そしてその制御メカニズムは我々の身体という見かけの全体を構成する多細胞組織の理解にも敷衍され、ノイマン型コンピュータの設計とも重ねみることができる。ゆえにデネットは「わたしたちは、ロボットの末裔である」と結論づける。しかしそれは機械論的な決定性を謂うものではなく、むしろ逆の探索の道を拓くものである。

巨大分子の振舞いにみられる疑似的な主体性(のようなもの)は、果たして我々が「人間らしさ」として問い続けてきた「主体たること」とどのような関係にあるのか。あるいはそれはある種のメタファーなのか。仮にメタファーだとしても、それが成立するということには、そこにどのような「意味」があるのか。それは我々が「言語」を用いて思考することと、どのように関係しているのか——本稿は、おそらく一世紀近く続いてきたこの手の議論に、2023 年的な状況を踏まえた新たな補助線をいくつか書き加える試みである。

## 1. 意味と合理性の射程について

### 1-1 意味の力動性

ジョージ・レイコフとともに「認知言語学」の領野を拓いた『レトリックと人生』『肉中の哲学』の共著者、マーク・ジョンソン。その主著と言われる『心のなかの身体』で彼は、一貫して 20 世紀後半における「意味の理論」(それに伴う合理性の理論)に生じた危機を訴える(p.54)。レイコフとジョンソンが批判の対象とする「客観主義」の問題は、(特にジョンソンにおいては)人間なるものへの解釈における身体性の軽視にあり、それによって進む「意味」の切り詰めにある。

標的とされたのは、直接的には哲学の「言語論的転回」の担い手とされた、言語学における

生成文法派の動きであり、またそこに根拠を与えたゴットロープ・フレーゲを源流とする分析哲学の広がりである。しかし一方でレイコフやジョンソンは、自身らの作業を支える認知科学の発展についても批判的な目を向ける。特にジョンソンは応用可能な新たな言語モデルの策定を求めたレイコフとは、協働しつつも異なる目論見を抱いていた。それはデカルト以来囚われ続けてきた心身二元論——「客観主義」もまたその新たなバージョンである——の抜本的な書き直しである<sup>1</sup>。

言うまでもなく心身二元論批判は、20世紀哲学の重要なテーマであり、多くの論者がそこに向き合ってきた。それを踏まえつつジョンソンは、レイコフが提案したメタファーへの着目を手がかりに、その作用を「言語使用」の場面から広げ、より始原的な「意味」の萌芽態として「イメージ・スキーマ」の概念を提起する。その画期性は、言語以前のゲシュタルトに「力動的性」を見出して、パターン整理を試みていることにある (p.100)。

この運動や知覚的相互作用の水準で創発される時空間的方向づけのメカニズムに、「意味」の発生の契機を見出すアイデアは、のちに展開される彼のモラル論の核心たる「安寧 (=Well-being)」概念に奉仕する「バランス」や「習慣性」に関わる数々の事例の発見に展開され、それらの複合によって人間の「高度に構造化され、価値を担った、また人格化された領域として形をなしはじめる」「複雑な意味構造」(p.254)に橋渡しされる——メタファーは、その結果として社会的に承認されたものなのである<sup>2</sup>。

## 1-2 意味のネットワーク性

このジョンソンの提案を真摯に受け止めるならば、「意味」とは、かなり幅をもった概念であると捉えねばならないだろう。

そもそも「意味とは何か」への問いは、オグデンとリチャーズの古典(『意味の意味』(1923))の指摘に遡るならば、彼らがその問題に正対するまで、哲学者たちは極めて曖昧に扱っていた。それは同書において列挙された、「意味」の用法の多様さに表れているように (p.262) 文脈依存的であり、そのことを問う行為自体がウロボロスのであったといえる。そしてオグデンとリチャーズ自身も、せつかくこの分析を踏まえながら「象徴場」の議論に引き寄せられ、「意味 meaning」という語そのものが内包することがら全体への関心は薄れていく<sup>3</sup>。

以降は言語の恣意性を謂うことによって巧みに「意味」の問題を迂回したソシュールに倣うように、「意味論」は先送りされ続けた——ちなみに、フレーゲの議論(『意義と意味について』1892)も、数理的厳密さの追求というコンテクストのもとに「意味=真理値」に問題を限定し (p.42)、「意義=思想」(p.61)をその背景に退けたことで知られている。そしてそれに連なる分析哲学の系譜においては、日常語的には「意味」として語られうることがらの多くを、視界の外に置くことになった<sup>4</sup>。

こうしてメタ言語の領域に封じ込められた「意味への問い」は、アルジルダス・グレマスによって救い出されるまで、包括的な議論とはならず、棚上げにされ、自明性の中に放置されつづけていた。しかしグレマスが『意味について』(1970)で主題化したのも、「意味なるもの」を実体として取り出すことを諦めたからで、「意味」を「作用」と捉えたからこそ「意味論」は

可能になったといえる——「意味作用は、言語活動のあるレベルからもうひとつのレベルへの、ある言語活動から違った言語活動へのあの転移でしかない。意味はコード変換のこの可能性でしかないのである」(p.14)<sup>5</sup>。

グレマスは、この変換には二通りあり、一つは表現コードから内容コードへの「回付」、もう一つは「志向性(方向)として」(p.73)現れ、コミュニケーションの過程をなすという。彼はそれをあくまで言語活動の一環として捉えつつ、身振りなどの身体表現をも含むプログラムとして認識していた。一方、ジョンソンはのちに『心のなかの身体』でサールを引きつつ、「志向性」がネットワークを成すことを説明している(p.344)。グレマスに対する直接の言及はないが、明らかにそこには「意味」を広いパースペクティブで捉えようとする共通する姿勢がみられる。

### 1-3 意味と合理性の間

「意味」の発生は、決して理性的言語使用の領域に閉じてはいない——今日、一般的に受け入れられているこの前提が、なぜすんなりと広がっていかなかったのか。イアン・ハッキングは、そもそもの哲学における「意味の問題の不在」を訴える(『言語はなぜ哲学の問題になるのか』p.97)。彼によれば、言語論的転回はデカルト的心身二元論のインターフェイスであった「観念」の場を、「公共言語」に移すかたちで行われた。したがって、その後高まっていった「意味」の議論が、その大きなステージの下部構造として扱われるようになったことは無理もない。

そこにおいて重要な役割を果たすのが「合理性」の概念である。ジョンソンは、デカルト以来、「意味」が「合理性」に引きつけられて論じられてきた伝統に対して、引き継がれてきた「没身体性」が、「非命題的」でアナログな領域を、論じるべき対象から除外し続けていると厳しく批判する(『心のなかの身体』p.28, 34)。そしてジョンソンは「意味」について「記号表象と現実との間の抽象的關係」(p.30)として広く捉えることを提案する。すなわちそこには言語以外の「心的表象」も含まれ、それもまた有意味性の対象領域となるのである。これはハッキングがいうインターフェイス的機能に対応する<sup>6</sup>。ジョンソンがレイコフとともに、言語学の「客観主義」化に反対したのは、その解釈では言語と意味の本来の關係性を捉え損なってしまうと考えたからだ。

この異議申し立ては、「意味」を「合理性」の支配から救出する議論を喚起する。ジョンソンが射程に置こうとした非命題的な「意味」領域は、必然的に身体との關係において捉えられるべきもので、そこには「理性」に抗する「感性」の支配するところとして眼差しが注がれてきた。「合理性」とは、いわば「合・理性」でありその底流には Ratio (=整える～計算主義的思考)が常に含意されてきたといえよう。特に後期近代においては、その引力は資本と科学主義の加速度的膨張によって歯止めが効かなくなっていた。ウェーバーの定式を待つまでもなく、「合理性」は道具化し(スタノヴィッチ、p.14)、思考の大前提とみなされながら「限定」(reasonable)化される(ハーバート・サイモン)という矛盾を抱え込むことになる。

ジョンソンは哲学史に照らすことによって、この狭隘化した「合理性」に再び豊かさが取り戻せると考える。その重要な手がかりがカントの「想像力」概念であり、身体はその読み直しの中で思考のメカニズムの中に積極的に位置づけられるようになるのだ——レイコフが設けた

問いの枠組みを利用し筋道を立てていった、メタファーからイメージ・スキーマへの概念装置の広がり、その接続を担う思考デザインを企図したものといえよう。

ジョンソンがこのような方法をとったのは、1970年代に大きく発展した認知科学を巡る動向への強い疑いが動機となっている。実際レイコフとの協働は、一般には「認知科学」の「言語学」への応用と見られているが、ジョンソンはレイコフよりも根源的なレベルでの批判を考えていたと思われる<sup>7</sup>。

## 2. 二元論をインターフェイスする——「心」に対する問いの建て方

### 2-1 心身二元論の軌

このように「意味」への問いがなかなかストレートに開かれていかないそのもどかしさの根本原因は、心身二元論そのものに内在する「力学」にあるように思われる<sup>8</sup>。仮にデカルトがこうした方法によって人間の自律を理解しようとしたのは、近代の黎明期における必然だったとしても、それから400年以上も「思想」がその軌に囚われ続けたのはなぜだろうか。そこには「意味」「合理性」の軸足のグラつきと同様の、土台の不安定さがあったからではないか。

マルクス主義がもたらした唯物論的一元化の熱狂が、文明史的にみて短命であったのは、その論理が拠って立つ弁証法的「止揚」が、そう簡単にもたらされなかったことによって説明できよう。「革命」の現実や「社会主義」移行への困難さ、そこに抱え込んだ矛盾に止まらず、その標榜する「科学主義」が、19世紀末の現象学に端を発する言語哲学、認知科学、コンピュータ科学などの進展によって揺さぶられ、相対化されていくさまは、「二元論」そのものの強靭さを逆説的に証明しているようでもある。

特にその対立関係が心脳問題にずらされる過程にある20世紀において、我々はその攻防を見ることができる<sup>9</sup>。もとよりデカルトは分離された精神と身体双方の機能的接点を、脳の最奥部の松果腺に集約するイメージを持っていたが、フッサール、メルロ＝ポンティらの現象学が、知覚・感覚の複雑性を捉えたその核心たる「総合性」を、再び脳科学の発展は「中枢性」「因果性」に引き戻した。この身体機能の脳イメージへの収斂は、解析を物理的実証・実験の次元に切り詰める一方で、一方の「心」を論じるステージには混乱を呼び込んだのである。

認知科学、脳科学が支配する領域においては、「意味」への問いは後景に退き、「意識」が主に問われるべき対象とされる。それとともに、「意味」の生成は真理値の関数として統語論の領域に封じ込められ(生成文法や分析哲学)、再び身体性から引き離される——この新しい地勢図は、まさに「二元論」が息を吹き返した現代的構図であり、学問の科学主義的精緻化の仇花であった。その次元に我々が回帰したのは、視界の周縁に残る「解き明かせない＝不可視」領域を棚上げにするためだったのである。

そもそも「二元論」は、両極間に橋渡しし難い隔たりが生じることによって形づくられる。あるいは「一元論」が取りこぼした残滓がそれを要求したとみなすことも可能だ。とはいえそれが成立するためには、双方がしっかり対称を成すことが必要である。1980年代以降、ヒラリー・パトナム、ポール・チャーチランド、ジョン・サールらが次々「心の哲学」を掲げ、認知

科学、脳科学、コンピュータ科学の隆盛に備える構えを整えようとしたのは、そのためである。本稿でのちに論じるダニエル・C・デネット、アンディ・クラークらも、その列に連なる者と考えてよい。

しかし、マーク・ジョンソンはこれらの論者とは異なるスタンスを執っている。もちろん「二元論」への問題意識は重なり、また彼らから多くの知見を引いている。しかし既に概観したように、彼はあくまで「意味」という概念にこだわった。そして驚くべきことに、その源流を「身体」に置き、脳機能に収斂させない、積極的なパラダイム転換を提案したのである。

## 2-2 仮置きとしての「心」

その独自性は『心のなかの身体 (*The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*)』という表題に示されている。「健全な精神は、健全な肉体に宿る」という古来よりの箴言の図と地を裏返したようなこの奇抜なタイトルは、しかし他の同時代の「心の哲学」と一線を画している。すなわちジョンソンは、端から身体を心的なものと同列・対照させず、内-外の互いに包摂しあう構図に置き、なおかつ本来「心的」な現象のカテゴリーであるところの「意味」の源泉を身体の機能に結びつけようとしたのである。

こうした設定は、先に上げた同時代の論者たちと明らかな対照をなす——それは「心」なるものの論じ方に表れる。ここで興味を惹かれるのは、いわゆる「心の哲学」者として括られる人々が、その「実体」を掴もうとしてなお容易ならざることから、論を始めている点である。

例えば、デネットは「心」なるものが存在し、かつ「脳」に還元され得ない理由を四つ上げる——(1) 紫色の牛が[イメージとして]描き出される(※=心的イメージの例)ときの、仲立ち・手段であること。(2) 考えるもの、すなわち「我思う、故に我あり」というときの、その「我」であること。(3) ワインを賞味したり、人種差別を憎んだり、誰かを愛したりすること。あるいは〈問題[重要]であること〉の源泉であること。(4) 精神的[道徳的]責任をもって行為すること。またサールはもっと端的に、「心的」と我々が呼ぶことがらの特徴を以下の四つに整理する——(1) 意識の存在 (2) 志向性 (3) 主観性 (4) 因果性<sup>10</sup>。

しかし、こうしたさまざまな「心」の存在を指し示すことがらのランダム性は、実際彼らを悩ます源となった。ゆえにそこからそもそもの問いの対象である「心とは何か」を一旦棚上げにして、「そこに迫る」方法の提示に止まった——サールが「志向性」を軸に二元論をずらし(概念二元論)、デネットがヘテロ現象学なるメタ理論を提示しつつも、「心」そのものに対しては、その多様性に留保せざるを得なかったのは、そもそも彼らが「心なるもの」を実体化して想定しようとする態度を崩せなかった証と見ることもできよう<sup>11</sup>。

対してジョンソンは、そもそも「心なるもの」に直接にアプローチできるものとは考えていなかったと思われる。というのもタイトルこそ『心のなかの身体 *The Body in the Mind*』とはしているものの、「心=Mind」そのものへの言及は本文中に乏しい。総合的に指し示すのであれば、ヨーロッパ哲学の伝統に則って「精神」ということばを使い、あるいは「意味」「理解」「理性」「思考」「推論」などの「心」を構成する要素について述べるに止まっている<sup>12</sup>。

ジョンソンほどではないが、「心の哲学」者たちも、「心=Mind とは何か」を大上段に論じる

よりも、「現象」「作用」「内容」「状態」「表象」「出来事」などの言葉を飾る接尾辞「的」を用いて（心的〇〇のように）「心」の在処を指し示すことがもっぱらである。とするならば「心的＝mental」なことがらを通じ、間接的に垣間見えるにすぎない「心」を、二元論の一翼として仮置きしなくてはならなかった理由は、どこにあったのだろうか。

### 2-3 「心」の領域をいかに設定するか：パトナムの仮説による補助線

この難問に応えるためには、デカルト～カントの近代初期哲学の主題が、「人間らしさ」を問うことにあったことに立ち戻るべきだろう。実際、ジョンソンもその方法をとった。カントの「想像力」概念に戻ること、そして二冊目のレイコフとの共著『肉中の哲学 *Philosophy in the Flesh*』において（おそらくその執筆は、ジョンソンのリーダーシップの下に行われた）、アリストテレス以来の哲学史に内在するメタファーの論理の発掘を企図したことに、それは表れている。

ジョンソンにそのインスピレーションを与えたのはヒラリー・パトナムである。ジョンソンは「メタファー」の構造的発見を起点にジョージ・レイコフとおよそ20年に亘り協働関係を続けたが、その中で各々の主著（レイコフ：『認知意味論』、ジョンソン：『心のなかの身体』）が刊行された1987年は大きな転換点であった。この頃から各々の「意味」に対する問いが、異なる学問的目的（レイコフ＝言語学における新しい「モデル」の提示／ジョンソン＝「身体性」解釈による学際的なハブとしての哲学の再定位）に分岐し、協働のかたちが変化をしていくのだが、そのきっかけとなったのがヒラリー・パトナム『理性・真理・歴史』だったのである。

パトナムのこの著作は、いわゆる「転向」といわれるほどの大きなインパクトがあった<sup>13</sup>。それ以前の自らの数学的、計算機的機能主義を退け、「内在的实在論」に視座をさだめる理論的構えの転換は、多くの人々を驚かせたが、ここで注視すべきは、ヨーロッパ哲学史を支配しつづけたあらゆる「二元論」に差し向ける容赦ない批判の目であったといえよう。その点で言えば、レイコフが詳細に引用・検討の対象とした「パトナムの定理」は、そこに至るプロセスの一つに過ぎず、ジョンソンの受容態度の方が、核心を突いているように見える。それが *Body in the Mind*、あるいはその後の *Philosophy in the Flesh* の構図を生み出す出発点となる。

パトナムの画期性は、長らく「二元論」の始祖のように思われていたデカルト自身が、実は「心と脳は本質的に統一されたものと主張した」と解釈している点にある（『理性・真理・歴史』p. 119）。「心」の機能を「松果腺」に託す局所論的思考は、逆説的ではあるがその証であったのだ。そして言う——「〈心〉と〈物質〉を二つの別々の種類の実体あるいは二つの別々の属性の領域として扱うことを避ける一番もっともらしい理論は、心理学的な属性が機能的属性と同一であるとする理論である（p. 121）」——すなわち「一元論」の可能性に果敢に挑むのである。

ジョンソンがパトナムから受け継いだのは、このアプローチである。パトナムの「内在的实在論」は、決して「内-外」を分けた上でその「内」の相対性に居座るものではなく、「〈客観主義〉と〈相対主義〉の間に中間地帯があるという考え」（『心のなかの身体』p. 371）であり、そこで描かれた構図は、敷衍の存在を前提とする空間ではなく、ものごとを有意味化するネットワーク的体系なのだ——（パトナムの見解によると）「われわれは世界に現に触れているが、

それはつねに媒介された仕方なのだ」(p. 381)。ここにおいて我々は、「心」とは何かに関する重要な仮説に到達する。「意味を媒介(インターフェイス)する機能のネットワーク」——ジョンソンが提示した「イメージ・スキーマ」は、人間の「心」なるものを構成する要素概念であったのだ。

#### 2-4 ネットワークが形成する「社会」: 廣松渉の「身心問題」

「心」の本質をネットワーク性と見定めることによって、そこで有意に結びつけられる対象は、「二元論」的領域機制を乗り越えて、任意の広がりを持つことが許される。ジョンソンがパトナムからコンセプトを継承したほぼ同時期、廣松渉はこの点について、マルクス主義を出発点とした「社会哲学」「歴史哲学」の概念分析を行う立場から言及している(『身心問題』1989)。廣松はさらにヨーロッパ哲学との独特の距離感を持って問題に臨んでいるが、興味深いことにその論旨は、ここまで考察してきた「パトナム＝ジョンソン」のスタンスに非常に近い<sup>14</sup>。

廣松は、「身体のうち心がやどる」といった素朴な観念への批判的検討から出発する。そしてその過程において仏教的あるいはアジア的な人間観も交えながら、ゲシュタルト・チェンジ、パラダイム・チェンジの必要性を説くわけだが、廣松の独自性は、その対立項は主体に閉じたものではなく、「自-他」関係に——すなわち、他者の「心」をいかに捉えるか、という問題に展開している点にある。廣松は、それについて「デカルトの『コギトの命題』と相即する(…)『意識の各私性の命題』とし(p. 131)、それを議論するためには、「射映的現相の自他への帰属化という間主体的(間身体的)な事態が進捗する過程」(p. 132)の分析の必要性を謂う——ここに、身心(心身)の媒介性を読む契機が現れる。

その補助線としてのポイントは、身体を“機能的反応状態系”をなす「オープン・システム」として理解することにある(p. 107)。すなわち身体を「皮膚的限界に閉じ込められ」たもの(p. 105)とは考えず、知覚の対象たる世界との物理的反応をも含む関係概念として措定する考え方である——これは廣松自身も他所で言及しているが、ハイデガー＝ユクスキュルの環世界や、ギブソンの生態学などと重なる「身体」観であり、それにともなって「心」も基本的には機能・機構的には重なる「同一」のものとして、「領域的」には捉えられることになる。

そうなると、「身体」と「心」を仕分けるものは意識、意味、意志といったカテゴリーとしか言えなくなる。いやむしろ逆に、これらのファクターこそが「心」として名指しされる対象群であるということになる。それらは間主体的に「自-他」を越えて「帰属」という機制を介して「変換」される(p. 96)——廣松はその機制の4つのタイプを「附属」(p. 210)、「投入」(p. 211)、「類推」(p. 217)、「言語」(p. 221)に関わる問題として段階的に議論するが、このプロセスにおいて「意識」は「意味」の問題に“格上げ”される(p. 219)。比喩的に言い換えれば、「意味」は「心」のレベルの関数であり、「自-他」の関係性＝共同性の生成の過程で生じるのである。

当然ながら、「自-他」関係は社会においてはネットワークを成す。間主体性を主題化して

きた廣松にとっては、「身心（心身）問題」とは、その網の目の生成のされ方の問題ということになろう。

### 3. 主体と拡張：イメージ・スキーマとその力動性について

#### 3-1 自由と合理性—オープン・システムの仮説特性

「身心（心身）問題」を「二元論」の克服として捉える点において、廣松とパトナムの結論は非常に近い。パトナムはその背理法的検証の手続きの煩雑さのために、また廣松は独自の概念的熟語を次々繰り出すために、突き合わせが難しいが、パトナムの「内在的实在論」は、廣松の「オープン・システム」の提案を内部観測的に読み替えたものと考えられることは可能に見える。有名な「水槽の中の脳」の思考実験（『理性・真理・歴史』第一章）も、懐疑論の文脈で解釈するよりも、その機能の「オープン性」を謂ったものと考えた方が、生産的だ。実際、廣松も脳機能自体を「オープン」なものとして言及している（p. 154）。

と謂い得るのも、こうした「二元論」からのゲシュタルト・チェンジの試みには、いずれにも、オートポイエーティックな自己組織化の原理が織り込まれているからである。この点においては、マトゥラーナ＝ヴァレラに戻るよりも、社会システム論に応用したルーマンのロジックを参照した方がよいだろう。その「機能システム」の安定・複雑性縮減の鍵を握る二値コードの仮説は、極めて意味論的であり、これも裏返して見れば、「社会」の自己組織化の原理に文化的カテゴリーが介在することを前提しているものといえる。

本稿のコンテクストから言えば、そこにこそ物理的空間ではなく、ネットワークとしての「心」を仮定するチャンスがある、となろう。というのも、基本的にそこには制御（control）としての作用が含意されているからである。パトナムの「内在的实在論」にも廣松の「オープン・システム」にも、その対象が無限に広がることをとどめる、ある種の力動的概念が仕込まれている——そもそも、廣松が主題に据えた「間主体性」自体がそれにあたり、パトナムが『理性・真理・歴史』の後半に紙幅を割いた「合理性」の問題にも、そうした位置づけが与えられている<sup>15</sup>。

パトナムは、「合理性」を「正当性」の判断根拠として位置づける。その際に、20世紀に目立つようになったこの概念を巡る二つの科学主義的動向——論理実証主義と相対主義が抱え込んだ問題、あるいはその相互に「行ったり来たりする」議論に対して批判的な態度を示す。すなわち「それらの研究はどちらかといえば哲学にとっては周辺のなもの」として、その過度の形式性に危惧を表明している——「どちらの種類の科学主義も、理性の及ぶ範囲での、冷静で人間的な記述を与えようという課題を、忌避しようとする企てなのである」（p. 189）。

ここで注目すべきは「人間的」というワードである。そもそも先に見た心身二元論の超克を主張する中でパトナムは言う——「われわれの世界は人間の世界である。そして、何に意識があり、何にないのか、何が感覚を持ち、何が持たないのか、何が質的に類似しており、何が類似していないのかはすべて、究極には類似性と差異性に関するわれわれ人間の判断に依存しているのである」（p. 154）。ここでことさらに「人間」を強調するパトナムの狙いはどこにあるの

か——この点について、パトナムの問いに廣松の推論を重ねると、見えてくる部分がある。

廣松は、身心問題の核心を物理的「身体的事態」の「心理的なもの」への変換過程に見るが (p. 95-6)、そこに「自由」の観念を挿入する。しかしここではそれは単に「選択の自由」といったポジティブな方向性を示すものではなく、一定の与えられた「自由度 (選択の余地)」の存在を前提する両義的な働きをなすものとして考えられている (p. 119)。これによって我々は“こころ”なる、ブラックボックス的 (空間的) エージェント機能を仮設しなくてもよくなる。

廣松はさらに、能動性と受動性が出会う点、そこで「選択」や「判断」が働く——ここに注目する。そしてこの変換過程においては、一方的な主体性も客体性もなく、むしろそこには「反転的共軛性」 (p. 159, 165) が見られるという。「軛」という文字を用いた力学的関係——本稿では、ここにネットワークの機能解釈の手がかりを見てみたい。というのも、そもそもの出発点であったマーク・ジョンソンの「イメージ・スキーマ」の概念にまさにそうした性格が表れているからである。

### 3-2 イメージ・スキーマからコネクショニズムへ

ジョンソンは「意味」と「合理性」の危機は、その客観性・形式性への切り詰めによってもたらされたものであると言う。その根拠を彼は、「意味」や「合理性」の検証をする方法が過度に「命題的」なアプローチに偏っていたことを指摘することに求め、イメージ・スキーマとともに、メタファー、身体そしてカントの「想像力」概念にその新たな水準を求める (『心のなかの身体』 p.26-29)。このアプローチは、「心」を物理的「身体」と対立させず、その「知覚的相互作用と運動プログラムに、繰り返し現れる動的パターン」 (p.17) にその構造的基礎を見出す。「意味」は、そこで「身体」と精神性とをつなぐ回路上に位置づけられる。

このロジックは、廣松の『身心問題』と構図を共有しているように見える。廣松は同年出版した『表情』をその具体例として、そこにおける「意味」はまさに非命題的に現れ、かつ (命題的な) 言語とも連続性を有するものとして語られる (p.152, 172)。この点は、ジョンソンが「命題性/非命題性」を互いに排他的なものとして捉えていないことと重なりあう<sup>16</sup>。このように心的現象を「身体」との二元論的構図に置くことをせずに、そのつながりに注目しその相互性に「意味」の発生を見る方法は、廣松では「共軛」と表現され、そこに微視される受動・能動の「転換」イメージは、前記号的パラダイム、すなわちコネクショニズムの論理を彷彿とさせるものである。

というのも——もちろん廣松はそこまでは踏み込まないが、彼が繰り返し主張する「脳のオープン・システム」性は、人工知能研究を可能ならしめる必要条件を示唆しているからだ。だが時代は、一方に認知科学や脳科学の発展を、もう片方にコンピュータ科学の世代論的発展をパラレルに置きつつ、その接続には苦しみ続けていた。実際今日も、1980年代後半以降の加速度がついたコンピュータの進化イメージに強引に引っ張られ、「AIがいつか可能か」という問いは、実現し製品化されたプログラムの実効性が脳機能をシミュレートすることの延長線上に位置づけられてしまった。こうした「心」が機械論的 (あるいは計算主義的) 唯物論の草刈り場と化するような状況は、今日も続いている<sup>17</sup>。

しかし廣松からの補助線を得て、改めてジョンソンの概念配置を見直すならば、イメージ・スキーマの議論に見出される「力学的」アイデア——例えば『心のなかの身体』において、「バランス」が原意味的身体経験をもたらし (p.177)、それが繰り返され数々のパターンが抽出されスキーマが形成されるという説明には、廣松的「転換」の「端緒 (局所)」のダイナミズムを読み取ることができる。そしてその約 12 年後、『肉中の哲学』におけるジョンソンは、その「端緒」を、さらに「意味の萌芽態」として微視し、「プライマリー・メタファー (メタファーの源泉領域 : p.72)」の概念に到達する (第一部、第 4 章)。

ここで注目すべきは、ジョンソンが「プライマリー・メタファー」をニューロン・レベルの経験＝学習によるものと定位し、そこから「心像 (イマジユリー)」に結びついていく説明を行っている点であろう (p.77)。コネクションニズムの核心をなす、ニューロンの再帰的・並列分散的情報処理の論理が、イメージ・スキーマの形成過程の説明と重なり合うのは、認識可能なメタファーの複雑さ自体が「統合されたもの」としてあるからであり、その始原的形態が、早期幼児期の経験あるいは子どものメタファー獲得のプロセスに発見されることによって証明される (p.63,65) からだ。

ニューロンの並列分散処理 (PDP モデル) の哲学的基礎づけから出発したアンディ・クラークは『現れる存在 : 脳と身体と世界の再統合』において、乳幼児が自立歩行を獲得する前段階に遍くみられる「仰向けキック」行動に注目するが (p.105)、これこそが (クラークはその概念は用いないが)、ジョンソンの論じる「プライマリー・メタファー」の基盤となる「力学的パターン (p.106)」の現れといえる——ここに更なる補助線を引いてみよう。

### 3-3 「意味」が対象をつなぎ、再帰的に「心」をなす

クラークとジョンソンの発想が重なり合う点は数々あるが、第一に「心」なる概念を、どのようなものとして扱っているかにその理論の類似性を見ることができよう。既に確認したように、ジョンソンの『心のなかの身体 *The Body in the Mind*』のタイトルに示されている「心」「身」の相互包摂関係は、パトナムから獲得された二元論の超克の意図と通底しているが、クラークもまた同じように「心」の概念域を「漏れ出る」「外に広がる」、すなわち拡張志向の流動的なものとして捉えている——この点は廣松のいう「オープン・システム」に近い。

しかしクラークの「心」は (これもまた、ジョンソンらと同様に) 空間的構図をなすものではなく、機能の集合体である。ニューロンの中枢器官 (中央処理装置) なき作動 (p. 63) は「モデル」「青写真」なき発達によって回路 (ネットワーク) を広げていく——そのプロセスは極めてアブダクティブ (仮説推論的) であると言える<sup>18</sup>。この本来、実体化されざる対象である「心」がまさに二元論的世界観では「実体」的に捉えられていた理由こそが、運動の繰り返しによって獲得されたイメージ・スキーマのなせる業であったということができよう。

ジョンソンの二つの著作 (『心のなかの身体 *The Body in the Mind*』『肉中の哲学 *Philosophy in the Flesh*]) のタイトルを改めて比べて見ると、「心 : マインド」と「身体」の相互的な入れ子関係を、改めて理論的に検証する意図があったことがわかる。そのダイナミックに入れ替わるポジションは、両者をつなぐもの＝指し示すもの (関係概念) としての「意味」の位置づ

けを象徴しており、その媒介性、変動性、揺らぎやすさをなんとか表現しようとした工夫に思えてくる——ゆえに、「合理性」をその支えとして、我々は求めるのだ。

ところで、こうした概念の重ね合わせをしていくと、それでもこの二人の理論的スタンスにも微妙な違いがあることに気づく。それは、先にも指摘した、身体の物理的知覚が意味論的に変換される、その「端緒（局所）」の描写に関わる表現である。クラークは身体や環境が与える「制約 constraint」にももちろん注目するが、それよりも主たる文脈においては、ニューラル・ネットワークや心的あるいは身体的ふるまいは「制御 control」系が組み立てられることによってシステム化するものと述べていく。それに対し、ジョンソンはもっぱら「制約」としてその「意味」の発生を理解しようとしている（“Gestalt Structure as a Constraint on Meaning” “How Schemata Constrain Meaning” など）<sup>19</sup>。

ここで再び廣松を引くならば、この違いは、その「端緒（局所）」において能動性に注目するか、受動性に注目するかによるものといえよう——しかし、実際に現象においては、その両方が「意味」においては生起しているのである——パトナム、廣松を介し、ジョンソンにおけるヨーロッパ的伝統＝二元論の超克を見てきたわけだが、クラークとは、この一点において（その他多くのパースペクティブを共有しながらも）違う世界を見ていたことが印象づけられる。一方、ジョンソンの哲学者としての孤高は、このこだわりにも以てしているようにも思える。

#### 4. 制御と制約と自由：二つのサイボーグ概念の間で

##### 4-1 デネットとクラークの「制御 Control」

アンディ・クラークは、「意味」の生成のプロセスを、人間とロボットと粘菌などの単純な生物の世界を行き来しながら説明する。それは彼の眼差しが神経細胞にフォーカスされている証であり、ロボティクスもそのシミュレーションの範疇に位置づけられているからこそ、可能な論理展開であると言える。まさにこの点が、コネクショニズムの真骨頂なのだが、そこにはダニエル・C・デネットの影響を強く読み取ることができる。

デネットは、表面的にはクラークよりもパトナムやジョンソンと共有している部分は大きい。大著『解明される意識』では正面切って「カルテジアン劇場」、すなわちデカルト的二元論の刷り込みを仮想敵として論じ、また言語中心主義的アプローチを認知科学の立場から相対化するなど、批判の切れ味は鋭い。しかしその超克となると、彼はまたサールやチャーチランドなどと同様、「心」「身」間の隔たりへの架橋を試みるが、パトナムやジョンソン（あるいは廣松）のように、その構図自体の書き換えというところまで踏み出すことはしない<sup>20</sup>。

むしろ、その打ち出された手法である「ヘテロ現象学」が、テキストに依存していることに表れているように、やや問題から距離をとって安全・相対的視点を確保せんとしているようにも見える。また、当初の主題である「意識」からのちに『心はどこにあるのか』へ関心をスライドさせながらも、その「心」なるものが何を指し示しているかについては、明言は避ける（「さまざま心」）——その「意識」との関係、「思考」「意味」などの概念との関係にも留保的態度が見られる。

しかしそれは「心」を進化論的に捉え、しかも環境との関係により変化し、ゆえに多様なものとして捉える観点において、逆に理論としての安定が図られているともいえよう。デネットにとっての「心」は「制御システム」(『心はどこにあるのか』p. 148)であり、とりわけ人間においてそれは「外界につくった一連の周辺装置に、心(いわば知的活動)を代行させてしまう」(p. 216)力を発揮する点において、極めて可塑的であり、柔軟に解釈すべき対象ということになるのだろう。

「それが人であると、ものであると問わず、仮想機械をみずからのコントロール・システムとしているようなものならどんなものも、紛れもなく意識なのだと言ってもよいのであって、それが意識なのだと言ってもよいのは、そのような仮想機械を備えている(から)こそなのだ」(『解明される意識』p. 334)——デネットが、「心」の問題を「機械」「装置」として解釈しようとする姿勢を示すとき、それがレトリックなのか、あるいはジョンソンやレイコフが言う意味でメタファーなのかはさておき、それは一つの革新的態度であったといわずにはいられない。

まさにクラークが受けた影響は、この点にある。この人間=機械(もうひとつの二元論)の超克を企図したようなイメージは、「制御」がその核心を担っていることを指し示している。そしてそれをつかさどるエージェントとして「心」を言い換えることが可能ならば、「意味」は最早問われず、それは「情報」概念に置き換えられることが可能になるのである(『心はどこにあるのか』p. 119-129)。

#### 4-2 ジョンソンはなぜ「制約 Constraint」を強調したか

クラークは、『現れる存在』の5年後(2003)に『生まれながらのサイボーグ *Natural-Born Cyborgs*』という刺激的なタイトルの著作を発表している。同時期ブームとなったマトリックスや攻殻機動隊のコンテクストと重ねて、つい人間の機械化(情報技術による人体改造)を想像してしまいたくなるが、本著の主旨は真逆で、我々人間もそもそもは「サイボーグ」的な環境との情報処理関係に置かれてきたのだという、人類史的な発想転換を促す提案にある<sup>21</sup>。

確かにこの思考実験は、情報技術が人間を介さずにさまざまなプロトコルによって複雑なフィードバック回路を駆動させる社会に対して、想像力を喚起させる現実的なトレーニングなのであろう。また、その「不可視性」という点において、冒頭にあげたウイルスの問題も、その延長線上にあることも確かだ。人間は(というよりもあらゆる生物は——あるいは、疑似生物的行為をプログラムされたロボットも)この広義のサイバネティクスの環境の中にいる。

しかしこの想像力が得られたとして、我々はどこへ向かうべきなのか——そこに置いてクラークは、重要な示唆を与えてくれる。それはクラークの思考実験における「言語」のポジションにある。「言語」は「批判的道具」であり、これを手にすることで「人類はサイボーグ的な生き方の第一段階に入った」(『生まれながらのサイボーグ』p.127)と彼は言う。もちろん我々は「生まれながら」に環境を「相補的な能力」として取り入れるループの中にいるわけだが、それを発展させていくためには安定した「足場」(「仰向けキック」で手に入れたような)が必要なのだ——そして認知的にそれを手助けする「道具」が「言語」だ、と謂う。

この「言語=心の道具」というアイデアも、デネットからクラークに継承されたものである

う（『心はどこにあるのか』p.168）。デネットは「言語」には「次は何をするか」の自問を与える機能があると言うが、それがサイバネティクスの「制御」のループを意識する契機となり、再知覚のプロセスを生み出す——これによって「何層にも重なった意味」（『生まれながらのサイボーグ』p.121）が形成されるのだ。クラークは特にこの言語の「公共的」機能に注目する。「究極の人工物」（『現れる存在』第10章）として彼がその機能を強調するのは、それが人間特有のニューラル・ネットワークの再帰性・自己言及性を象徴するからである。

この回路の「制御システム」としての働きを常にポジティブに述べ続けていたクラークが、言語の章では珍しく「制約」という言葉を説明に用いる点に注目したい（p.403-404）。ここで言語が「制約」を結びつけられるのは、それが「探索すべき選択肢の空間を絞り込む」「ネットワークの、結合荷重空間内での現在の位置（その現在の知識）」（p.404）を与えるからである。それに基づき我々は「選択の自由」を得る——この指摘は、廣松渉が「共軌」の受動・能動性の中に「自由度」を見出した（『身心問題』p.172）分析と重なる<sup>22</sup>。

この力学＝空間的「自由」が「主体性」の源泉となる——ジョンソンがメタファーのパターンとイメージ・スキーマの関係の中に発見したメカニズムも、ほぼこれに近いものといえよう。こうして我々の問いは、再び「人間」にとって「意味」とは何かという問題に還っていくのである。

#### 4-3 サイボーグとして生きる、そして悲観はしない。

1980年代後半以降、日本において人文学系「情報学」を牽引した西垣通も、「こころ」を主題に掲げていた時代があった（『こころの情報学』1999）。しかしそのコンテキストは、本稿で展参照した大陸系「心の哲学」とはほとんど交わずに、独自の思考を積み上げたものであった。その理由は、彼が生粋の「コンピュータ工学者」であったことに求めることができるだろう。自らの出発点である「機械」のロジックを相対化するために彼が選んだ方法は、ベイトソンやマトゥラーナ＝ヴァレラの「生物」を参照することであった。その結果、その「こころ」の概念は「いのち」の論理に引き寄せられていく。

その西垣は、1994年に『ペシミスティック・サイボーグ』という評論集を著わしているが、文字通りその全体を貫くトーンは、機械の論理に人間の生が侵食されていくことに対し、悲観的である。西垣はかなり早い時期からAIに対する論評を重ねてきたが、その批判もAIそのもののメカニズムや技術思想に対してというより、それに対する二次言説の神話性に主に向けられており、その流れは現在にまで続いている（『秘術としてのAI思考』1990～『AI原論』2018）。そしてむしろ西垣の学問的情熱は、2000年代以降「情報」概念を基礎づけることに向けられ、機械の論理としてのサイバネティクスを、重層化させて「生命」にアプローチする道を選んだ。しかしその論理的展開の底には、不可視性を恐れ、未だに「生命」「機械」の二元論的構図の強固さを容認する無意識が読み取れる——それはなぜなのか<sup>23</sup>。

西垣の「サイボーグ」概念は、いわゆる大衆的な、「人間性」が排除された無機質な疑似生命体の外形的イメージをそのままトレースしている。それはアンディ・クラークのそれとは全く逆のものであり、それは微視的にニューロン・レベルにおける機械性を肯定するところから積

み上げたものとは一見相容れない。しかしそれは必ずしも対立するものではない——クラークらが「究極の人工物」として置いた「言語」の扱いが、おそらくそれを解く鍵となる。何故ならその「道具性」がまさに、インターフェイス（交換器）の役割を發揮するからである。

とはいえ、その「言語」をまた閉じたシステムとして実体化してしまうと、我々は間違えてしまうだろう。「言語」はあくまで我々が「意味」をつなぐための一つの手段でしかないのである。その一線に踏みとどまり、「非命題的」な関係性を含む「心」なる領域について、我々の「生存権」に関わるものとして丁寧に配視していくためにも、改めてマーク・ジョンソンが発見したその「端緒（局所）＝イメージ・スキーマ」の「意味の萌芽」的な働きに、思想的に正当な評価を与えるべきなのだ<sup>24</sup>。

## 註

- 1 客観主義批判は、レイコフとジョンソンの初期の「協働」（『レトリックと人生』1980）においては、主にその「神話」性に向けられている（第 25、26 章）が、そもそもその出会い（1979 年 1 月）において、「その時われわれは、西洋哲学や言語学で権威あるとされている意味に関する見解は不適切であるという点で共通の認識を抱いていることに気付いた」（「まえがき」と語っている。
- 2 ジョンソンは 1990 年代「モラル論」を中心に単著を重ねるが（参考文献参照）、その転回は、「心 Mind」への関心がメタファーを介した自己制御へ収斂していったためである（『肉中の哲学』第十三章「自己」）。
- 3 オグデンとリチャーズは、意味の多義性を解く方法として「指示と象徴との錯綜」（象徴手続きの批判的吟味）に視点を絞る（p.300）。
- 4 「分析哲学の方法論的基礎を成すのは自然言語ではなく論理言語なので、論理言語から全く独立の概念分析は分析哲学の本道を行っているとはいえない」（八木沢、p.15-16）
- 5 フレドリック・ジェイムスは逆説的に、グレマスが意味を作用として分節化したことによって「（その意味論的四角形は）ある任意の出発点 S から、意味の可能性の全複合体、まさに完全な意味体系を引き出すことのできる方法を固形化した」（ジェイムスン、p.169）と評するが、それはこの体系が「対立」と「矛盾」によって構成されるとの仮説を貫いたからである。そもそもこの仮説は極めてソシュールの恣意性の産物であることは言うまでもない。
- 6 デネット『心はどこにあるのか』の訳者：土屋俊の「あとがき」には「現代の英米の哲学は二十世紀の中葉に「言語」の分析を主要な方法としてひとつの完成を見た。デネットによる「心」の哲学は、この方法を駆使するとともに、言語へのこだわりを超えるところに重要な貢献がある」とある。ハッキングがいうように「観念」から「言語」への主題の転移が、「インターフェイス」性に関わる問いの発展であるとするならば、その先に「心」の問題があるという流れは、妥当なものといえよう（ハッキング、p.289-290）。
- 7 この辺りのジョンソンとレイコフの「同床異夢」については、拙稿「転回と学際性：G.レイコフと M.ジョンソンの視差について」（日本記号学会『記号学研究』に掲載予定）にて詳しく論じている。
- 8 ここで「力学」という言葉を用いるのは、理論家の思考のなかにもメタファーがあり、往々にして

それは見落とされる、というメタ指摘のためである。

- 9 脳科学の発展により、心身問題は心脳問題にスライドする傾向が顕著になったが、心脳一元論に対する批判同様、身体の機能的反応も脳機能に集約されないゆえに、当然単純化すべきではない。しかしデネットに見られるように、ニューラル・ネットワークの働きを徹視的に謂い、解いていくことは、「方法的」に身一心の関係を解く上で有効であるともいえる。その点廣松渉は、身体と脳双方の機能的状態を両睨みにしながら『身心問題』を論じようとしている（「意思的覚識と身体的過程」p.91-128）。
- 10 デネットの分類については『解明される意識』p.50（「心という代物による諸々の演出」）、サールの「心的現象の四つの特徴」については『心・脳・科学』p.6-10。
- 11 ヘテロ現象学は「現象学に代わる方法」と銘打ってはいるが、単純にインタビューとそのテキストへ向かう態度の問題として捉えることもできる。文化人類学的アプローチやロボット（シェーキ）の行動観察への適用は、興味深い（『解明される意識』p.88-126）
- 12 ジョンソンは同書の主題を説明する一節においても「身体を精神に置き戻す」（p.16）と言い、「心」はその語を用いる論者からの引用以外ではほとんど使わない（例えば p.321 のフレーグにおける想像力への言及）。この点も彼の論理が「心の哲学」と一線を画している特徴とみなすことができる。ジョンソンにとって「心」はあくまで「仮置き」の概念だったのである。
- 13 パトナムの「転向」は、論理的冷静さに裏打ちされたものというより、ある意味「内在的實在論」に踏みとどまることへの情熱的決意と言っている。詳しくは『理性・真理・歴史』の野本和幸による訳者解説参照（p.325-326）。
- 14 その共通性を読み取る鍵は、「物的世界と心的世界の二重化」「認識主体への（反省的）内在化」の着想にあると考えられる（『身心問題』p.43）。この点についてはいずれ稿を改めて論じてみたい。
- 15 『理性・真理・歴史』の後半のコンテクストは「合理性」に関する議論に傾き、「意味」や「心身問題」から一見離れていったように見える。しかし合理性を「有効な目的／手段の結合を発見し、その結合を「公共的に」確立してくれるような方法」としている立場は、意味を（言語によって）支える機能としては見落とせない（p.268）。
- 16 「私の主張を要約しよう。ある発言の概念内容なり命題内容なりを云々するのに不都合はまったくなくない。ただし、この命題内容が、われわれの身体経験から創発する、非命題的な図式構造の複雑な網のおかげで初めて可能になることを忘れてはならない」（『心のなかの身体』p.63）。
- 17 ポール・チャーチランドの消去的唯物論をその代表例のひとつと見ることは出来よう。
- 18 パース的なアブダクションの機能とジョンソンの論理（特に「投射」と「メタファー」）の関係については、佐古仁志が指摘している（佐古、2018）。
- 19 原著の目次より。3章「意味の制約としてのゲシュタルト構造」5章「図式は意味、理解、そして合理性をどのように制約するか。特に5章の要約では、「制約 Constraint」が重要なワードであることについて、次のように説明している——「イメージ図式が意味と理解を「制約する」と言うこと、隠喩体系が推理を「制約する」ということは、図式や隠喩体系が理解と推理にかんしてある範囲の可能なパターンを確立すると言うことである。図式や隠喩体系は水路のようなものである。ものはそこを、制限された相対的自由であれともかく自由に動くことができる」（p.273）。

- 20 むしろデネットについては、機械概念を拡張させることによって、脳機能との「制御 Control」の親和性を見出した点に注目したい（「いったいどうして私は、人間の意識をソフトウェアにたとえることにこだわっているのだろうか」『解明される意識』 p.260）。
- 21 「わたしたちの深遠なるサイボーグ的本質を最も十全に表現するのは、宇宙を旅する身体ではなく、形態を変化させる心である」（『生まれながらのサイボーグ』 p.318）。
- 22 自由が極めて「制約」性を伴った概念であることは、齋藤純一の以下の回りくどいが極めて適切な定義にも表れている——「自由とは、人びとが、自己／他者／社会の資源を用いて、達成・享受するに値すると自ら判断する事柄を達成・享受することができる、ということの意味する（ただし、他者の同様の自由と両立するかぎりでの自由は擁護される）」（齋藤、「はじめに」）。
- 23 西垣の論理には、もともとの「人間：機械」の二元論の軸をさらに「人間＝生命：社会」の二元論で固める結び目の解き難さがみられる。その背景には、概念の神話化に対するややあきらめにも似た悲観主義（≒美意識）を、約 40 年重ねたビブリオグラフィを貫くトーンとして受け取ることができる。
- 24 マーク・ジョンソンの「イメージ・スキーマ」に対して思想的評価を行うには、『肉中の哲学』にも見られた「道徳」への関心とその背景にあるカント的「想像力」の援用、そして近年の自然主義への傾倒への流れを見通さねばならない。本稿ではそこまでの言及は到底できない。

#### 引用・参考文献

（邦訳、日本語文献）

- マーク・ジョンソン『心のなかの身体 想像力へのパラダイム転換』菅野盾樹・中村雅之訳、紀伊国屋書店、1991
- ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン『レトリックと人生』渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳、大修館書店、1986
- ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン『肉中の哲学 肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』計見一雄訳、哲学書房、2004
- ジョージ・レイコフ『認知意味論 言語から見た人間の心』池上嘉彦・河上誓作他訳、紀伊国屋書店、1993
- チャールズ・オグデン、アイヴァー・リチャーズ『新版 意味の意味』石橋幸太郎訳、新泉社、1967
- アルジルダス・グレマス『意味について』赤羽研三訳、水声社、1992
- ゴットロープ・フレーゲ「意義と意味について」土屋俊訳、「意義と意味詳論」野本和幸訳（黒田亘・野本和幸編『フレーゲ著作集 4 哲学論集』勁草書房）、1999
- ヒラリー・パトナム『理性・真理・歴史 内在了実在論の展開』野本和幸・中川大・三上勝生・金子洋之訳、法政大学出版局、1994
- ダニエル・C・デネット『解明される意識』山口泰司訳、青土社、1998
- ダニエル・C・デネット『心はどこにあるのか』土屋俊訳、ちくま学芸文庫、2016
- ジョン・サール『心・脳・科学』土屋俊訳、岩波書店、2005
- ジョン・サール『MIND 心の哲学』山本貴光・吉川浩満訳、朝日出版社、2006

水島久光

- ポール・チャーチランド『物質と意識 脳科学・人工知能と心の哲学』信原幸弘・西堤優訳、森北出版、2016
- アンディ・クラーク『認知の微視的構造 哲学、認知科学、PDP モデル』野家伸也・佐藤英明訳、産業図書、1997
- アンディ・クラーク『現れる存在 脳と身体と世界の再統合』池上高志・森本元太郎監訳、ハヤカワノンフィクション文庫、2022
- アンディ・クラーク『生まれながらのサイボーグ 心・テクノロジー・知能の未来』呉羽真・久木田水生・西尾香苗訳、春秋社、2015
- キース・スタノヴィッチ『現代世界における意思決定と合理性』木島泰三訳、太田出版、2017
- ハーバート・サイモン『意思決定と合理性』佐々木恒男・吉原正彦訳、ちくま学芸文庫、2016
- イアン・ハッキング『言語はなぜ哲学の問題になるのか』伊藤邦武訳、勁草書房、1989
- フレデリック・ジェイムソン『言語の牢獄 構造主義とロシア・フォルマリズム』川口喬一訳、法政大学出版局、1988
- 廣松渉『身心問題』青土社、1989
- 廣松渉『表情』弘文堂、1989
- 西垣通『ペシミスティック・サイボーグ 普遍言語機械への欲望』青土社、1994
- 西垣通『こころの情報学』ちくま新書、1999
- 西垣通『AI 原論 神の支配と人間の自由』講談社、2018
- 八木沢敬『意味・真理・存在 分析哲学入門・中級編』講談社、2013
- 齋藤純一『自由』岩波書店、2005
- 水島久光『閉じつつ開かれる世界 メディア研究の方法序説』勁草書房、2004
- 水島久光「ベンジャミン・リー・ウォーフと「学際」～言語の輪郭をめぐる問題について～」（『東海大学紀要文化社会学部』第9号）、2023
- 水島久光「転回と学際性 G.レイコフと M.ジョンソンの視差について」（日本記号学会編『記号学研究』第1号）、2023（予定）
- 佐古仁志「「投射」を手がかりにした「アブダクション」の分析と展開」（日本記号学会編『叢書セミオトポス 13 賭博の記号論』、2018  
(英語文献)
- Johnson, M. (1987) *The Body in the Mind: the bodily basis of meaning, imagination, and reason*, The University of Chicago Press.
- Johnson, M. (1993) *Moral Imagination: Implications of Cognitive Science for Ethics*, The University of Chicago Press.
- Johnson, M. (2014) *Morality for Humans: Ethical Understanding from the Perspective of Cognitive Science*, The University of Chicago Press.